

短期大学看護学科における高大連携事業に関する高校生の 学習意欲と職業的アイデンティティの発達

豊島めぐみ, 石井あゆみ, 津田右子

要 旨

本研究では、高大連携事業で実施された授業に対する評価を行うとともに医療系高校生の職業的アイデンティティと学習意欲を明らかにすることを目的とした。その結果、授業を受け看護に興味を示した生徒が多く、授業内容の感想に体験学習内容を記載する生徒が多かった。また、進路志望による比較では3年生の看護師志望群の職業的アイデンティティは医療職志望群に比べて有意に高かった。両学年の学習意欲において有意差は認められなかった。学年による比較では、3年生の職業的アイデンティティは、2年生に比べて高い傾向に留まった。高校生にとって進路選択の自己決定をサポートすることはきわめて重要であり、高校生の発達課題達成を考えて職業的アイデンティティの形成や学習意欲を高める授業展開を考えることが高大連携事業に重要であることが示唆された。

Keyword: 高大連携, 職業的アイデンティティ, 学習意欲

1.はじめに

高等学校大学連携事業（以下、高大連携）は、1999年12月の文部科学省中央教育審議会（以下、中教審）の答申「初等中等教育と高等教育との持続的改善について」¹⁾を契機として多様な取り組みが行われている。高等学校教育段階の教育目標には、「生徒が自らの在り方生き方を深く考え、将来の進路を選択し、決定する能力や態度を身につけるとともに、各自の興味・関心、能力・適性、進路等に応じて選択した分野の学習を深める」ことが掲げられ、特に将来にわたって明確な目的意識を持って学習や職業的生活を継続していくための主体的に学習する態度を身につけることが重要である²⁾。近年、18歳人口の減少により、大学進学が珍しいことではなくなると共に、進学の目的意識が希薄化してきた³⁾。「高校生活と進路に関する調査」⁴⁾によると、進路選択の際に「自分の就きたい職業が分からない」「自分の適性（向き・不向き）が分からない」など半数以上の生徒が職業選択について悩んだ経験を持ったことが明らかである。このような教育を取り巻く状況において、大学は高大連携の取組を通じて、生徒一人一人の能力・意欲を踏まえつつ、教育的観点から進路選択に関する取組の機会を生徒に積極的に与えていく手法を考えると同時に、それらの成果をフィードバックした大学教育を展開していくことが重要である。

近年の看護師養成学校新設による看護系入学定員増からも分かるように、高校卒業後の進路として看護師養成学校を志望する生徒が増加しているが^{5), 6)}、その志願動機も多様になっている。細川らは「看護

学とはどのような学問か、また看護師とはどのような役割を持つのかをイメージできることは、進路を選択する高校生にとって重要である」⁷⁾と述べている。本学では、平成27年度より高等学校の看護・医療コースの2年生と3年生を対象に短期大学の看護学科教員による「看護・医療入門」科目の講義が開始された。教育目的として、医療・看護に関心を持つことにより、職業選択の一助となる⁸⁾ことをあげている。教育目標として、①大学の教員の講義・演習に触れる、②大学の高度な施設・設備を用いた体験学習を通して生徒の学習意欲を高める、③実際に看護に携わる教員の講義により職業選択・進路選択をより具体的にイメージして職業的アイデンティティ発達の機会とすることなどである。これらの授業を通して学習意欲を引出し、その学習意欲が看護職や医療職への職業的アイデンティティの形成につながると考えられた。そこで、高校生を対象に、高大連携事業で実施された授業に対する評価を行うとともに学習意欲と職業的アイデンティティを質問紙調査し、その学年差から医療系高校生の職業的アイデンティティと学習意欲を明らかにする。

2. 方法

2.1 研究デザイン

質問紙法を用いた探索的研究である。高大連携事業を通して短期大学看護学科の教員が専門的な授業を行うことで、医療系高校生の職業的アイデンティティと学習意欲を明らかにする。研究デザイン概念図を図1に示す。

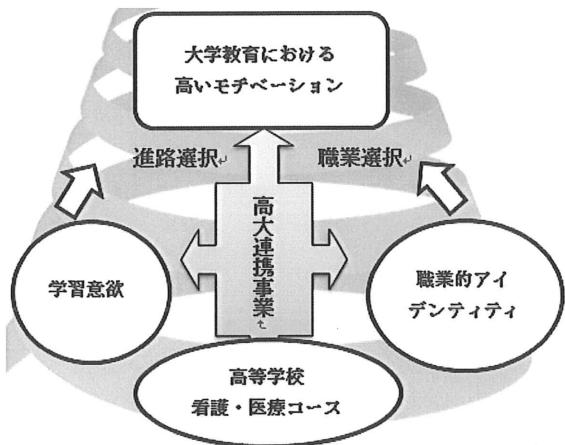


図1 研究デザイン概念モデル

2.2 調査対象および調査時期

A 高等学校「看護・医療コース」の2年生31名と3年生31名を対象とし2016年1月～2月に実施した。各学年に実施された「看護・医療入門」は、授業回数は2年生21回、3年生15回通年。授業テーマは看護の4つの概念、人間・健康・看護・環境を基本として、授業形態は講義、見学、体験学習、グループワーク発表、基礎看護学実習学習発表会参加などである。

2.3 調査内容

「看護・医療入門」授業後、対象者に一斉に調査協力の依頼を書面及び口頭で行い、質問紙法（無記名自記式）で調査を実施した。調査協力に同意が得られた場合は所定の封筒に入れて机上に置くことにより回収した。調査内容は以下のとおりである。

- 1) 進路選択に関して、進路の選択状況を決定・未決定から回答を求め、進路選択が決定している場合は、看護師と看護師以外の医療職から選択した。
- 2) 受講した授業に関しては、内容の分かりやすさ、看護への興味、授業が進路選択の参考になったかを4段階尺度での評定を求め、さらに授業の感想を自由記述とした。
- 3) 職業的アイデンティティに関しては、波多野らが開発した「職業的アイデンティティ尺度」⁹⁾¹²項目から高校生に適切でない2項目を削除した10項目について「1：とてもそう思わない」から「5：とてもそう思う」の5段階尺度で評定した。この職業的アイデンティティ尺度のCronbach α 係数は0.901であった。
- 4) 学習意欲に関しては、J.M.Keller¹⁰⁾のARCSモデルに基づく4領域〔注意（Attention）・関連性（Relevance）・自信（Confidence）・満足感（Satisfaction）〕34項目の質問について「1：とてもそう思わない」から「5：とてもそう思う」の5段階尺度で評定した。

2.4 分析方法

受講した授業に関して内容の分かりやすさなど授業評価の項目は単純集計を行った。また、職業的アイデンティティおよび学習意欲に関してT検定（SPSS 24.0J for windows）を用いて学年間の平均値の差の検定を行った。看護・医療コースにはさまざまな医療職を志望する生徒が在籍するために、看護師志望者を看護師志望群、看護師以外の医療職志望者を医療職志望群とした。この2群による平均値の差を検定し、有意水準は5%未満に設定した。

2.5 倫理的配慮

対象者に、研究目的・意義・方法・結果の公表・個人情報の保護・データの匿名性の保持・研究への参加が学業成績に影響しないことについて書面及び口頭で説明を行った。自由意思により調査用紙の提出を求め、提出をもって研究への同意を得た。また、本研究の実施に関して大阪信愛女学院短期大学生命倫理委員会に承認を得た。

3 結果

2年生30名（有効回答率96%）、3年生31名（有効回答率100%）の回答を分析対象とした。

3.1 進路選択と受講した授業評価について

進路選択の結果から、2年生では看護師志望は17名（56.7%）、医療職志望は12名（40.0%）であった。3年生では看護師志望は23名（74.2%）、医療職志望は5名（16.1%）あった。進路選択に明確な回答が得られなかった2年生1名、3年生3名を取り除いた。

つぎに、「授業は分かりやすかったか」について、2年生では「とても分かりやすかった」16名（53.3%）、「分かりやすかった」14名（46.7%）であった。3年生では「とても分かりやすかった」22名（71.0%）、「分かりやすかった」9名（29.0%）であった。「授業を受け看護に興味を持てましたか」について、2年生では「とても興味を持てた」15名（50.0%）、「興味を持てた」15名（50.0%）であった。3年生では「とても興味を持てた」21名（67.7%）、「興味を持てた」9名（29.0%）、「興味を持てなかった」1名（3.2%）であった。「授業内容が進路の選択肢の参考になりましたか」との問い合わせ、2年生では「とても参考になった」7名（23.3%）、「参考になった」21名（70.0%）、「参考にならなかった」2名（6.7%）であった。3年生では「とても参考になった」20名（64.5%）、「参考になった」11名（35.4%）であった。自由記述式で問うた授業内容の感想に体験学習内容を記載する生徒が多く、2年生24名（80%）、3年生29名（93%）が「体験学習が印象に残った」と記載した。

その体験内容は、2年生では「あかちゃんの抱っこ」や「ベッドメイキング」等であり、3年生では「車椅子の使用方法」「心肺蘇生」「沐浴」等であった。

3.2 職業アイデンティティ・学習意欲について

3.2.1 進路志望による比較

進路志望に明確な回答が得られなかった2年生1名、3年生3名を取り除いた看護師志望群(2年生17名、3年生23名)と医療職志望群(2年生12名、3年生5名)の職業的アイデンティティと学習意欲の尺度得点差を学年ごとに比較した

3年生の看護師志望群の職業的アイデンティティ平均値: $4.49 \pm SD: 0.44$ は医療職志望群 3.96 ± 0.33 に比べて有意に高かった ($t=2.53, p<.05$) が、2年生の看護師志望群 4.23 ± 0.59 と医療職志望群 4.20 ± 0.59 に有意な差は認められなかった。3年生の学習意欲は、看護師志望群の注意 3.83 ± 0.49 、関連性 3.65 ± 0.41 、自信 3.51 ± 0.37 、満足感 3.89 ± 0.45 で、医療職志望群の注意 3.50 ± 0.82 、関連性 3.53 ± 0.39 、自信 3.58 ± 0.44 、満足感 3.84 ± 0.83 であった。2年生の学習意欲は、看護師志望群の注意 3.51 ± 0.51 、関連性 3.48 ± 0.39 、自信 3.41 ± 0.40 、満足感 3.67 ± 0.37 で、医療職志望群の注意 3.60 ± 0.45 、関連性 3.44 ± 0.46 、自信 3.46 ± 0.29 、満足感 3.68 ± 0.44 であった。いずれの学年の学習意欲の4領域においても進路志望による有意差は認められなかった。

3.2.2 学年による比較

2年生の職業的アイデンティティと2、3年生の学習意欲に進路志望による差がなかったため、回答の得られたすべての生徒(2年生30名、3年生31名)を対象に職業的アイデンティティと学習意欲について学年間で比較した。その結果、3年生の職業的アイデンティティ 4.42 ± 0.46 は2年生 4.18 ± 0.61 に比べて高い傾向に留まった ($t=-1.76, p<10$)。2年生の学習意

欲は、注意 3.53 ± 0.48 、関連性 3.46 ± 0.41 、自信 3.40 ± 0.36 、満足感 3.66 ± 0.39 で、3年生の学習意欲は注意 3.80 ± 0.54 、関連性 3.64 ± 0.38 、自信 3.53 ± 0.36 、満足感 3.91 ± 0.53 であった。3年生の注意と満足感は2年生に比べて有意に高かった ($t=-2.04, t=-2.09, p<.05$) が、関連性と自信に学年間の有意差は認められなかった(図2)。

4 考察

本研究では、高大連携事業を受講した医療系高校生を対象に高校生の職業的アイデンティティと学習意欲を明らかにすることを目的とした。短期大学の看護学科教員による「看護・医療入門」科の講義の主たる教育目標は、大学教員の講義や演習に触れて学習意欲を高めるとともに、職業的アイデンティティを高めて進路選択をサポートすることである。看護・医療コースに在籍する多くの生徒は、これまでの経験から看護系に進学を希望した生徒が多い中、医療系進学志望の中でも看護師志望は、高等学校入学前の小・中学生の早期に抱いた漠然としたイメージから進路決定に至ることが多いと指摘されている¹¹⁾。また、高校生が看護系大学や専門学校に進学することは、その時点での将来の職業を決定することになるので、看護系進学志望者の高等学校における発達課題を考えて、職業的アイデンティティの形成を促すことが重要である。一般的に看護や医療の職業の認知度は高く、また生徒自身が病院へ受診するときには看護師が身近なロールモデルとなる確率も高いと考えられる。そのため、看護・医療コースに在籍する生徒は看護や医療の職業にある程度は具体的なイメージを有していると推定できる。今回の結果から受講生は両学年ともに授業内容に強い興味を示したことは、授業内容が生徒の抱いている看護や医療の職業イメージに結びつくものであったためと考えられる。将来の進路に役立つ情報を獲得することが、生徒自身の進路選択や職業的アイデンティティ形成に有効であると考えられる¹²⁾。授業の中で体験学習に深い印象を抱いたことから、より実際の医療現場に近い体験学習を経験することが高校生の学習意欲や職業的アイデンティティの向上に大きな影響となることを示唆したと考えられる。

1名を除く生徒が進路決定していた3年生に比べて、2年生の進路決定率は10%少なかった。3年生は卒業が近づき、就くべき職業を熟考したうえで進路選択を迫られるが、2年生では進路選択にまだ時間的余裕があると感じる生徒もいたと考えられる。これら進路決定の状況から考えると、職業的アイデンティティは高大連携事業の有無にかかわらず2年生から3年生に高まると考えられる。しかし、本調査結果では、

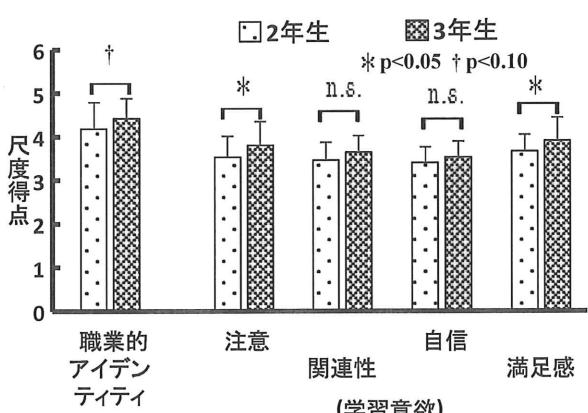


図2 職業的アイデンティティおよび学習意欲の学年比較

2年生に比べて3年生の職業的アイデンティティは高い傾向に留まった。進路を確定しかねている3年生は、看護や医療を目指して看護・医療コースに所属したものの看護や医療に興味を失い職業的アイデンティティの形成は促されにくかった可能性がある。そのことが3年生の職業的アイデンティティに影響したと考える。カリキュラム構成など学習の進め方について検討すべき内容も多いが、高大連携事業を運営する上で、このような生徒たちにも医療や看護を少しでも理解し、興味関心を持たせる医療教育の取り組みを検討する必要がある。学習意欲や職業的アイデンティティの形成変化を想定して2年生に看護や医療に必要な基礎的知識や技術を紹介する授業を行い、3年生に看護師の実践的な職業イメージを描かせる授業を行った。3年生の授業において行った「車椅子の使用方法」、「心肺蘇生」、「沐浴」などが受講生にとってより医療現場をイメージできる内容であったと推測できる。授業内容を検討するにあたって想定した生徒の状況と3年生の状況が合致したため、高校生2年生に比べて3年生の学習意欲の注意や満足感の向上を促すことができたと考えられる。しかし、学習意欲の関連性や自信に加え一般的に進路選択が迫った3年生で高まる職業的アイデンティティには学年間で差が見られなかった。職業的アイデンティティや学習意欲の関連性や自信については向上できるように今後授業内容を検討せねばならない。久川¹³⁾は、職業的アイデンティティと学習意欲は螺旋状に発達することを明らかにしている。すなわち、看護の学習は学生の職業的アイデンティティ達成を促し、アイデンティティ達成は看護の学習を更に深める。このことから、高校生に看護学科入学前より職業的アイデンティティ形成を促すとともに学習を幅広く進めていくことが重要であると考えられる。看護学科の教員が医療や看護について、よりリアルに授業展開していくことにより高校生の職業的アイデンティティ形成を促し、満足感だけでなく関連性や自信の学習意欲を向上させる授業内容の検討が必要である。以上のように、2・3年生を対象にした本調査結果は、職業的アイデンティティや関連性・自信の学習意欲に有意な向上が認められなかつたことから、特に3年生の授業で医療や看護について関連性や自信の学習意欲を高めるとともに、生徒の発達課題を踏まえ上で将来に向けての職業的アイデンティティ形成を考慮した授業展開の必要性を示唆した。

中教審答申が述べているように高等学校教育から大学教育へ円滑に移行できる1つの方策になるよう高大連携を実施し、職業選択の自己決定をサポート

している。ベネッセ教育総合研究所¹⁴⁾の調査から「高校卒業後に就職するか進学するか」については4割以上が、「どのような職業に就くか」については3割以上が、中学生までに意識している。落合ら¹⁵⁾が言うように質の高い学生を確保し養成するために、ひいては看護の質向上、看護における高い安全性の確保につながると考えられる。また、看護系への進路選択が高校以前に抱かれたイメージに起因することを考え合わせれば、中学生や小学生などを対象としたプログラム開発も検討が必要である。これらのこととは、短期大学や高校と地域の小・中学校の連携する環境整備に貢献すると考えられる。

まとめ

高大連携事業を通して医療系高校生の職業的アイデンティティと学習意欲を明らかにした。その結果、授業内容の感想に体験学習内容を記載する生徒が多く、興味を示した生徒が多かった。また、3年生の看護師志望群の職業的アイデンティティは医療志望群に比べて有意に高かった。学年による比較では、3年生の職業的アイデンティティは、2年生に比べて高い傾向に留まった。高校生にとって医療や看護への進学は将来の職業を決定することにつながり、この時期に進路選択の自己決定をサポートすることはきわめて重要である。高校生の発達課題達成を考えて職業的アイデンティティの形成をサポートとともに、学習意欲を高める授業展開を考えることが高大連携事業に重要であることが示唆された。

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました皆様に心から感謝いたします。なお、この研究は平成28年度「大阪信愛女学院教育研究助成」によるものです。

引用文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会答申(1999): 初等中等教育と高等教育との持続の改善について, 2016年3月1日閲覧,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309737.htm
- 2) 文部科学省: 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携(高大連携)の在り方について, 2016年3月1日閲覧,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/ko utou/02017/houkoku/06040408/001/004.htm
- 3) 大滝夏美: 高校生の進路選択に関する志向性と今後の高大連携施策のあり方について, 立命館高等教育研, 13, 15-30(2010)

- 4) 木村治生 編：高校生活と進路に関する調査、ダイジェスト版、(株)ベネッセホールディングス、ベネッセ教育総合研究所、(2015)
- 5) 文部科学省：看護師・准看護師養成施設・入学定員年次推移一覧文部科学大臣指定学校種別・年次別内訳、2016年8月28日閲覧、
file:///C:/Users/megumi/Desktop/学校数:文科省.pdf.
- 6) 日本看護協会出版会編集：平成27年看護関係統計資料集、学校養成所数及び定員、2016年8月28日閲覧、
<http://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei11-2016.pdf>.
- 7) 細川美千恵・高津三枝子・新野由子：高大連携支援事業における母性看護学の体験学習プログラムとその効果 - 高校生と看護学生の相互学習を通して -、高崎健康福祉大学紀要、12、223-231 (2013)
- 8) 大阪信愛女学院短期大学看護学科：平成27年度高校大学連携事業、看護・医療コース、シラバス。
- 9) 波多野梗子・小野寺杜紀：看護学生及び看護婦の職業的アイデンティティの変化、日本看護研究学会雑誌、16(1)、22-28 (1993)
- 10) J.M.keller：学習意欲をデザインする -ARCS モデルによるインストラクションデザイン - 初版第2刷発行、鈴木克明監訳、北大路書房、287-292 (2011)
- 11) 落合幸子・本多陽子・落合良行 他：医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連、医学教育、37(3)、144-149 (2006)
- 12) 高岸弘美・村松照美：高校生を対象として当事者参加型体験プログラムの効果に関する研究 - ひらめき☆ときめきサイエンスようこそ大学の研究室を実施して -、山梨県立大学看護学部紀要、13、61-68 (2011)
- 13) 久川洋子：看護学生におけるアイデンティティ達成状況と学習行動の関連
- アイデンティティ達成への教育の必要性をめぐつて -、天使女子短期大学紀要、18、1-13 (1997)
- 14) 前掲書3).
- 15) 前掲書11).

受理 2017年3月30日

〈連絡先〉

豊島めぐみ

〒538-0053 大阪府大阪市鶴見区鶴見6-2-28

大阪信愛女学院短期大学

E-mail: mtoyoshima@osaka-shinai.ac.jp